

主 題：主に喜ばれる歩みのための祈り③

聖書箇所：コロサイ人への手紙 1章10b-11節

テーマ：主に喜ばれる歩みを続けていくのに欠かせない要素とは何か？

今朝、皆さんと学びたいのは、コロサイ1：10-11のみことばです。これから内容を見ていくのですが、前回から少し間が空いてしまったので、今までに学んできたことを改めて思い返してみてください。私たちは、コロサイの兄弟姉妹のことを思ってささげられたパウロの祈りを考えてきました。この教会を最初に建て上げたのはパウロではなくて、彼の働きを通して救われたエパfrasという人物でした。パウロ自身は、この町の兄弟姉妹のことを恐らく直接は知らなかったのです。しかしある時、エパfrasの報告を通して、そんな教会が主に喜ばれる教会として忠実に歩んでいると聞かされて、パウロはそのことを喜び、神様の働きに心から感謝していました。もちろんこの時コロサイの教会が大きな問題を抱えているという現状も聞かされてはいました。彼らの間には間違った教えが徐々に広がっていて、信仰の土台が揺るがされそうになっていることもパウロはよく理解していたのです。イエス・キリストを否定して、キリストだけでは不十分だという真理をねじ曲げる教えが入り込んで、人々が混乱に陥っていることも気づいていました。実際に会ったことはなかったとしても、愛するコロサイの信仰者たちが危険や困難に直面してなお、主に喜ばれる者としてどうかますます成長し続けてほしいと願ったパウロの祈りのことばが、この1：9-14に記されていたのです。

○主に喜ばれる歩みのために：欠かせない六つの要素

そして、そんな彼の祈りのうちに、主に喜ばれる者として成長していくのに欠かせない六つの要素を見出すことができました。コロサイの信仰者のためだけではありません。私たち自身も主に喜ばれる者として成長していくときに、鍵となる六つの要素です。そして、そのうちの二つを私たちはもうすでに見てきました。

1. 神のみこころに関する知識に満たされること 9b節

主に喜ばれる者と変わり続けていくために、神のみこころに関する知識に満たされるということが欠かせなかったのです。パウロは9節でこう述べていました。「こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。」と。パウロはコロサイの兄弟姉妹たちが、神のみこころに関する真の知識で完全に満たされること、いっぱいになることを祈っていました。確かにこの教会のうちには、福音の力が働いていて、もうすでに信仰や愛や希望といった、すばらしい特徴も現われてはいました。でもそんな彼らがそれとどまるのではなくて、みことばのうちに明らかにされた神のみこころを知って、それによって生き方がますます変えられ続けていくことをパウロは望んでいたのです。もちろん、知識を蓄えると言ったときに、これはただの頭でっかちに聖書の知識を蓄えるということではありませんでした。その人の心が聖書に表された神のみこころに関する知識であふれるようになるだけでなく、その知恵によって歩みが変わられていくことこそが信仰者の成長には欠かせない大切なものでした。

2. 主にかなった歩みをしていくこと 10a節

二つ目に、主にかなった歩みをしていくことが、続く10節の最初に「また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、」と記されていました。パウロは、もうすでに忠実に歩んでいた兄弟姉妹たちが、神のみこころの知識に満たされるだけではなくて、それによってますますほかのだれでもない主イエス・キリストに似た者となっていくことを祈っていました。自分たちが勝手に考えるような目標にた

どり着くものではありません。主にふさわしい者として成長していくということ、それこそがすべての信仰者にとっても欠かせない歩みでした。そしてそれはもちろん、今を生きる私たちにとっても同じです。私たちが愛する主と自分自身の姿をいつも比べて、キリストに似た者へと日々変えられていくことを目指していくのです。いつまでもこの歩みが続くわけではありません。私たちはいつの日か必ず主にお会いする日がやって来ます。私たちはそのことを楽しみに待ち続けることができます。そのことを楽しみにしながら、その日がやって来るまで、キリストが聖くあられるように自分を聖くしていくのです。それこそが信仰者の成長に欠かせない重要なものでした。

どちらも非常に重要な真理でした。でも、これですべてが終わったわけではありません。パウロはあと四つ、欠かせない要素を続けて教えてくれました。なので続けて、聖書のことばを見ていきたいと思えます。きょうは三つ目から五つ目までを一緒に考えたいと思えます。その前に、確認したことを頭に入れながら、いま一度全体を押さえるために、9-14節までをお読みします。

コロサイ 1：9-14

「:9 こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされまじうように。:10 また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。:11 また、神の栄光ある権能に従い、あらゆる力をもって強くされて、忍耐と寛容を尽くし、:12 また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格を私たちに与えてくださった父なる神に、喜びをもって感謝をささげることができますように。:13 神は、私たちに暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。:14 この御子のうちにあって、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。」

3. 実を結び続けていく 10b節

さて、主に喜ばれる者として成長していくのに欠かせない三つ目の要素は、実を結び続けていくことです。真の信仰者はその歩みにおいて、いつも主が喜ばれる実を結び続けていくということです。パウロは10節で「また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び」と続けていました。まず注目してほしいのは、この「実を結び」という動詞には継続を表す現在形が使われていたということです。言いかえると、これはただ一回限り実を結ぶという話をしていただけではなくて、「あらゆる善行のうちに実を結び」続けることを、パウロは言わんとしていました。一度ではありません、途絶えることなく、継続的に実を实らせ続けていくことが、主に喜ばれる生き方だったのです。

また、それに加えてこの「実を結ぶ」ということばの意味自体も非常に興味深いものでした。このことばには、もちろん文字どおり「果物、果実や種を实らせる」といった意味もあります。でも同時に、「人の内側に実を生み出すこと、また実を实らせる」といった意味も含まれていました。あるギリシャ語の辞典はわかりやすく、このことばの持っている意味をこう描いていました。「カルポス（ギリシャ語“実を結ぶ”）という言葉は、自然の成長に由来し、木や土の生命力を利用して自然に成長するものを表しています。」と。ここで少し覚えていてほしいことは、このことばは自然に成長するものを表しているという点です。要するに、この実を結ぶということばには、何かその人の努力などによって生み出されるものではなくて、いのちを生み出す源と結びついていることによって、自然にその人のうちに生み出されるもの、そういった意味が含まれているのです。

さて、少し立ち止まって考えてみてください。これこそまさにクリスチャンの歩みでもありました。勘違いしたくないのは、この箇所「あらゆる善行のうちに実を結び」とパウロが口にしたとき、彼はまず自分の努力や良い行いによって神様を喜ばせなさい、そうでなくては、神様の前に正しいと認められることはありませんとか、私たちの良い行いが救いをもたらすと言わんとしていたのではありませんでした。もちろんパウロはそんなことを教えていないし、聖書の教えていることではありませんでした。むしろ聖書にはっきりと繰り返し教えられていることは、私たちはただ神様の恵みとあわれみの働きに

よって救われたということです。自分が何かしら良い行いを十分にしたから、神様の前に義と認められた、そんな者はひとりとしていません。すべての人が、キリストが成し遂げたみわざのゆえに、それを信じる信仰によって、完全な神様の前に義と認められたのです。

パウロも、例えばローマ5：1に「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」と書いていました。また、エペソ2：8-9に、「：8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。：9 行いによるものではありません。だれも誇るものがないためです。」とはっきり記されていました。この世の宗教は、良い行いや徳を多く積み重ねなさい、そうすれば天国に行くことができますと言います。でもそれに対して、聖書ははっきりと言うのです。「あなたのどんな良い行いも、完全な神様の前には無意味です」と。私たちのどんな正しい行いも、いっさいの罪を忌み嫌っておられる聖く正しい神様の基準を満たすことなど到底あり得ませんでした。だからこそ、私を含め、ここにいるひとりひとりみな、神様の前に滅ぼされてしかるべき者だったのです。だれひとりとしてこの状況をどうすることもできないし、文字どおり希望のない罪人でした。しかし、そんな私たちに対して、恵み深い神様が救いを用意してくださったのです。すべてが神様の測り知ることのできないあわれみ、驚くべき賜物でした。

こうして私たちは、ただ恵みのゆえに信仰によって救われました。すべてのみわざを、最初から最後まで成し遂げられたのは、救い主イエス・キリストでした。ただ、この方の死と復活によって、私たちは今、神様との平和を持っているのです。私たちから出たものはただの一つとしてありません。そもそも私たちはだれひとりとして救いに値する者はいませんでした。だから私たちが誇りとするものは、ただ主キリストの十字架でしかないのです。でも私たち、そんなすばらしい救いを信じ、受け入れた者たちは、それで終わりではありません。恵みによって救われた者たちは、何よりもキリストを誇りとして、自分を救ってくださった神様をほめたたえることを追い求めて生きていこうとするのです。大切なことは、確かに良い行いはその人を救うことはありません。でも、キリストの福音によって、真に救われた者は神様によって主に喜ばれる良い行いをする者へと変えられたということです。だからこそ、私たちはありとあらゆるふるまいを通して、キリストのすばらしさを証ししたい、そんなキリストの弟子にふさわしい実を結ぶ者として歩んでいこうとするのです。

先ほど読んだエペソ2章で、私たちの良い行いではなくて、恵みによって救われたのだと話した後、パウロは2：10で「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」と書いていました。また、イエス様もこう明白に述べていました。ヨハネ15：5、8で、「：5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。……：8 あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、（下線部を別訳するなら、「あなた方が多くの実を結び、わたしの弟子であることを証明することによって」）わたしの父は栄光をお受けになるのです。」と。健康な木は、それにふさわしい実を必ず結ぶようになります。それは当たり前なこと、ごく自然なことです。それと同じように、キリストに正しく結びつき、キリストにとどまっている者は、それにふさわしい実を必ず結ぶということです。なぜかという、ほかのだれでもない主が、聖霊なる神様が、私たちのうちに働いて、主に喜ばれる者へとますます変え続けていってくださるからです。

もちろんこれは、神様が働いてくださるなら、私たちは何もせずにただ待っていればよいという話をしているのでは全くありません。また、新しくされた者たちは、罪や過ちをいっさい犯さないという話でもありません。救われた私たちも罪を犯してしまうことがあります。神様を悲しませてしまうこともあります。でも同時に、救われた私たちは、神様とそのことばに忠実に従ってキリストに似た者へと

っていくことを目指して歩み続けていくのです。私たちが救ってくださった唯一の誇りであるキリストを喜ばせること、良い行いを通して主の栄光を現していきたいと歩み続けていくのです。私たちはもうすでに福音によって、そのような者へと変えられました。そして私たちが私たちのいのちの源であるキリストにとどまって生き続けていくなれば、例えばガラテヤ5：22-23で挙げられているような、愛であったり、喜びであったり、平安であったり、寛容であったり、親切や善意、誠実や柔和、自制といった、キリストの弟子にふさわしい実をますます実らせるように必ずなっていくのです。良い行いが私たちが救うのではありません。恵みによって救われました。そして恵みによって救われた者は、良い行いをする者へと変えられたのです。キリストにとどまり続けて良い行いを、実を实らせ続けていくのです。だから是非、自分自身に一度問いかけてみてください。果たして私たちは、そんなキリストにふさわしい実を实らせているのでしょうか？例えば人々が私たちの歩みを見るときに、ああ、この人はキリストの弟子だと気づくのでしょうか？主に従う者にふさわしい実を实らせ続けているのでしょうか？ただ主の恵みによって救われた私たちは、この方を喜ばせる者として、どんなときもキリストに、いのちの源に根差して、ますます主にふさわしい良い行いを続けていこうとするのです。

4. 神様を知り続けていく 10c節

続いて、四つ目に欠かせない要素として挙げられるものは、実を实らせ続けるだけでなく、神様を知り続けていくことです。10節の最後に「神を知る知識を増し加えられますように」と続いていました。ここで最初に注目してほしいことは、「増し加えられますように」という動詞に継続を表す現在形が使われているということです。ということは、つまりただ一回限り増し加えるという話をしていただけではなくて、神を知る知識を増し加え続けるということをパウロは言わんとしていたということです。一度ではありません、継続的に神様を知り続けていくということ、それが主に喜ばれる生き方でした。みことばを通して、主をますます知り続けていくのです。

でも、神様を知っていくことが信仰者にとって大切だということはどうどこかで聞いたのではないかと思う人もあるかもしれません。それはパウロが9節で、「神のみこころに関する真の知識に満たされ」と言っていたことと同じではないですかと。もしそんなふうに思われたなら、それはすばらしいことです。なぜなら、まさにそれこそがパウロのポイントでもあったのです。今10節を見てくださいけれども、視点を広げて、これまで見てきた祈りの流れを、もう一度よく考えてみてください。パウロは、コロサイの兄弟姉妹たちが主に喜ばれる者として成長していくことを願って、最初に神のみこころに関する知識に満たされることを祈り、その次に主にかなった歩みをしていくことを祈っていました。そしてその後、彼は良い行いをして実を結ぶことを祈って、そしてここで神を知る知識がさらに増し加わることを祈っていたのです。この四つにつながりが見えます。パウロは、この祈りの中で、神様を知ることと、私たち信仰者が生きていくこと、行動、ふるまいには密接な関係があるのです。これは非常に大切なことでした。私たちの信仰生活においても、この二つはどちらも絶対に欠けてはいけません。当たり前前に聞こえるかもしれませんが、もし私たちが主に喜ばれる良い行いをしようと思えば、そもそも主が何を喜ばれるのかを知らなくてははいけません。キリストに似た者になっていきたいと願うのであれば、キリストがどのように歩まれたのかを私たちは覚えなくてははいけません。だからこそ私たちは、神様がご自身の性質やみこころをすべて明らかにしてくださった聖書を開くのです。そうやってみことばを通して、私たちは神様がどのようなお方なのか、主が私たちに対して何を求めておられるのか、主がどのように歩まれたのかに心を留めようとするのです。それがなくては始まりません。

でも同時に、私たちがみことばをただの知識として蓄えることがゴールでもありませんでした。私たちは学んだ知識、学んだ真理を信じて、それによって実際に生きていく責任をも負っているのです。頭でっかちな知識ではなくて、さまざまな経験を通して、ますます神様のことを深く個人的に知っていくのです。例えばみことばを通して、父なる神様がすべてを支配されている主権者であると知り、ただ知

識としてだけではなくて、実際にその方に信頼して自分の置かれた状況を歩んでいこうとするのです。私たちはみことばを通して、イエス様がどれほど忍耐深く、私たちにあわれみを示してくださっているのかということを知ることができます。その模範にならって、ほかの兄弟姉妹に対して自分も実際にあわれみを示して生きていこうとするのです。みことばを通して聖霊なる神様の力がいかに力強いものであるかということを知ることができます。その力に実際に身を委ねて、まだ救いを知らない人々に福音を宣べ伝えようとしていくのです。もちろんそのようにして私たちが歩んでいけば、いろいろな場面に直面することになるでしょう。感謝にあふれることもあれば、悲しみや不安を味わうこともあるでしょうし、喜びを味わうこともあれば、難しさや痛みを覚えることもあるでしょう。でもそうやって、みことばを通して知った知識をただの知識で置いておくのではなくて、実際に生きていくなれば、良い時も悪い時も変わらずに生きて働いておられる神様の偉大なみわざをそこに見て、私たちは主のすばらしさをますます個人的に知っていくのです。ただのことばではない、確かに神様はすべてのことを支配しておられ、主が示してくださったあわれみを感謝して歩んでいこうとするのです。そうするとき、確かに私たちにとって拠り所だ、十分なものだ、と、神様の測り知れない力や知恵の偉大さを知るようになっていくのです。私たちがみことばを読んでそれを知り、そして知ったことを生きていけば、また神様のすばらしさを知り、そしてそのすごさがわかれば、私たちはますますそんな力があるみことばを読んで、学んで、自分のうちに蓄えて、それに従って生きていこうとするのです。そうやって私たち信仰者は終わらないサイクルを、神様を知り続けながら歩んでいこうとするのです。ですから、間違いなくみことばを通して神様を知ることと、信仰者のふるまい、私たちがどのように生きていくのかということは密接な関係がありました。どちらかが欠けてもだめなのです。

だとすれば、自分自身の歩みを少し振り返ってみてください。果たして私たちは神様を知ることにおいて、もうすでに満足しているかのように感じられていないでしょうか？ことばでは言わないかもしれませんが、自分はすべてを知っているかのようにふるまっていたりしないでしょうか？かつて詩篇の著者は、みことばに対する思いをこう口にしていました。詩篇 119 : 12、14-16にこうあります。「:12 【主】よ。あなたは、ほむべき方。あなたのおきてを私に教えてください。……:14 私は、あなたのさとしの道を、どんな宝よりも、楽しんでます。:15 私は、あなたのために思いを潜め、あなたの道に私の目を留めます。:16 私は、あなたのおきてを喜びとし、あなたのことばを忘れません。」と。果たして私たちは、聖書やみことばに対してこんな熱意や思いを、今持っているのでしょうか？神様を個人的に知っていくということは、あなたにとってどんなものにもまさる喜びでしょうか？自分自身に問いかけてみてください。あなたの成長に、みことばは本当に欠かせないものだと思っていますか？もしそうだとするならば、では私たちは日々の生活の中でどれくらい実際にみことばとの時間を取ろうとしているのでしょうか？少し質問を変えると、これは私自身にも今週問いかけ続けたことですが、私たちは果たしてどれくらいみことばと時間を取ることを中心に、ほかの予定を立てているのでしょうか？もちろんそれぞれにいろいろな責任や課題は毎日のようにあります。やりたいことも、やらないといけないこともいつもあります。できる時間を待っていても、その時は来ないかもしれません。でも、もし神様のことばが自分の成長に欠かせないものだ、と本当に信じているのであれば、みことばとの時間に自分の優先順位を置いているのでしょうか？私たちは本当に神様のことばが自分の成長に必要なのだと信じているのでしょうか？私たちが主に喜ばれる者として成長していくには、神様を知り続けていくことが絶対に必要でした。みことばを通して、愛する神様をますます知って行って、学んだ知識を実際に生きていくこと、そしてますますそのことを通して、神様を個人的に深く知っていくのです。そんな生き方こそ、四つ目に欠かすことのできない要素として挙げられていたものでした。

5. 神様の力によって強められ続けること 11節

さて、私たちはきょうの最後となる五つ目の要素を見ていくのですが、その前に、これまで私たちは主に喜ばれる者に成長していくのに欠かせない四つ要素、神様の教えを学ぶことができました。もしかしたら、今圧倒されてこんなふうになっているかもしれません。もちろん自分自身はみことばが言っているように、ますます成長していきたい、キリストに似た者へと変わっていきたくて思っています。でも罪深い自分には変わらなくてはならない部分が余りにも多過ぎるし、余りにも基準が高過ぎるし、どう考えても自分にはできそうもありません。もしそんなふうに感じている方がいるのであれば、まさにそのとおりだということです。私たちのうちにその力はありません。信仰生活を自分の力でどうにかしようとし続けるのであれば、必ずそこに失望を覚え、あきらめさえ覚えてしまうでしょう。しかし、私たちには抛り頼むことのできる大きな力があります。ほかのだれでもない偉大な神様に身をゆだねて歩んでいくことができるのです。そしてそれこそがパウロが次に祈っていた五つ目の要素でした。

五つ目は神様の力によって強められ続けることです。11節に、「また、神の栄光ある権能に従い、あらゆる力をもって強くされて、忍耐と寛容を尽くし」と記されていました。ここで注目してほしいのは、「強くされて」と訳されていた、この動詞です。言うまでもなく、これにはまたまた現在形が用いられていました。ということは、パウロは、コロサイの信仰者たちがただ一度強められておしまいという話をしていたのではありませんでした。神様からたった一回だけ助けや力を与えられて、あとのことは自分の力で頑張っていきなさいと言われていたのでは全くなかったのです。パウロは、彼らがあらゆる力を持って強くされ続けていくことを祈っていました。要するに彼らのうちに与えられる神様の力は、継続的で絶えることのない完全な力だということです。私たちのうちに働いているその力がいかにすごいものなのかを考えてみてください。そしてほかのだれでもない、神様によって、いつも力づけられながら歩むことができるということです。すべてを支配しておられる栄光にあふれた権威あるこの方の力によって、私たちは生きていくことができるということです。この力は、ただの力ではありません。この世界のすべてのものをことばによって造られ、この世界のものをすべて変わらずに保っておられるその方の力が、ご自身のひとり子をその死からよみがえらされた方のその力が、信仰者ひとりひとりのうちに働いて、必要な助けを与え続けてくださると言うのです。世界のすべてをことばによって造られた力がどんなにすごいか想像できますか？ 私たちには想像もできません。到底測り知ることのできない圧倒的な力を生ける神様は持っているのです。神様は弱い私たちのうちに働いて、その力をもって力強めてくださると言うのです。だとしたら、私たちにとってこれ以上に必要なものはあるのでしょうか？ すべてにまさって偉大な方がともにいてくださり、私たちが信仰者として歩んでいくための力を常に与え続けてくださるのであれば、それ以外に何か必要とするものがあるのでしょうか？

振り返ってみれば、この祈りを口にしていたパウロ自身も、彼自身のうちに働いている主の力に抛り頼み続けた人物でした。同じコロサイ1：28-29で彼はこう述べています。「：28 私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。：29 このために、私もまた、自分のうちに力強く働くキリストの力によって、労苦しながら奮闘しています。」と。確かにパウロはキリストのために熱心に働いていました。あらゆる人たちにみことばを教えて、ますます彼らがキリストにある成人として成熟した者になっていくことを願って、主に忠実に従い続けていたのです。そんな彼の歩みは、一見彼自身の力や知恵に基づいたものに見えるかもしれませんが、でも彼自身はそんなふうには考えていませんでした。パウロも、自分のうちに力強く働くキリストの力をいつも覚えて、それに抛り頼みながら、どんなときも奮闘していたのです。私たちは生ける神様が私たちのうちに働き続けてくださっていることを覚えることができます。私たちには到底理解することができないような力ある神様が、私たちのうちに働いて、力強め続けてくださっているということです。自分の力や知恵ではどうすることもできません。でも、どんなときもこの神様が私たちに必要な力を与えてくださり、強めてくださり、支え続けてくださるのです。だか

ら、罪深さを覚えて心が苦しいときや先が見えずに不安や恐れを抱くとき、私たちがいろいろな心の葛藤をや苦しみを覚えるときは、どんなに偉大な力を持っている方が私たちのうちに働いてくださるのかを思い出すことです。私たちはその方にゆだねることができるのです。私たちが持っている希望は、私たちが持っている揺るがない約束は、まさにこれでした。

同時に、神様がこうして力を与えてくださるのは、ただ力を与えることが目的ではありませんでした。もう一度11節を見ていただくと、「あらゆる力をもって強くされて、忍耐と寛容を尽くし」と書いてありました。この訳では読み取りにくいかもしれませんが、2017年版の聖書では「あらゆる力をもって強くされ、どんなことにも忍耐し、寛容でいられますように。」と表現していました。神様が力づけてくれる目的は、信仰者たちがどんなことに対しても忍耐し、寛容でいられるためでした。私たちは決してだまされてはいけません。あるとき、人がこんなことをあなたに言うかもしれません。クリスチャン生活というのは、何の困難も経験しない容易なものです。キリストを信じさえすれば、あなたの抱えているすべての問題から解放されて、もう苦しむことはありませんと。でもみことばを見れば、それは間違いなくうそでしかありませんでした。イエス様自身も弟子たちに向かってヨハネ15：20で「しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。」と言われていました。またパウロも、はっきりとこのように述べていました。Ⅱテモテ3：12で「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」と。言われていたことは明白でした。もしキリストを信じ、受け入れて、この方にすべてをささげ、忠実に歩いていこうとするのであれば、その者は必ず迫害を受けます。それが聖書の約束でした。キリストを信じていれば、問題がなくなるわけではありません。この世でこの方のために生きていこうとすれば、そこにはさまざまな苦しみが待っています。信仰のゆえに不当な扱いを受けることもあれば、悪にあふれているこの世の誘惑によって惑わされることもあります。自分自身の罪との絶え間ない戦いを経験することもあるれば、ほかの人の罪によって傷つけられてしまうこともあります。またそれ以外でもさまざまな数多くの試練や、主の懲らしめでさえ私たちは受けることもあるのです。間違いなくキリストの弟子として生きていくことには大きな犠牲や苦痛が伴うのは、確かな現実でした。

でもその中であって、私たちはすべてにまさる宝であるキリストを、どんな状況にあらうとも私たちが力づけてくださる偉大な神様を持っているのです。パウロは「どんなことにも忍耐し、寛容でいられますように。」と口にしていました。ここで「忍耐」と訳されていることばは、特に困難な状況におかれたときに揺り動かされないこと、耐え忍ぶことを意味しています。もう一つの「寛容」と訳されていることばは、特に人との間に難しさを覚えるときに、不満やいら立ちを覚えることなく、忍耐をもって接することといった意味を持っています。つまり、この二つのことばを用いて彼が言わんとしていたことは明白でした。たとえその困難な状況から来るものであっても、人から来るものであったとしても、私たちは忍耐をもってその中で歩いていくことが求められるということです。もちろん簡単なことではありません。コロサイの兄弟姉妹のことも考えてみてください。コロサイの兄弟姉妹たちは、大きな困難に直面していました。自分たちの信じる福音とは異なる教えをする者たちが教会の中に入り込み始めていたのです。彼らがその中で、主に喜ばれる者として忠実に成長していこうとすれば、当然、さまざまな迫害やにせ教師たちとの戦いもあったでしょう。私たちと同じように、彼らも自分たちの持っている罪との葛藤ももちろん経験していたことでしょう。でもそんな中に置かれていたからこそ、彼らが栄光にあふれた神様によって強められ、その力によって忍耐と寛容を尽くして歩むことができるようにと、パウロは彼らのために祈ったのです。そんな祈りを聞いたコロサイの兄弟姉妹たちは、どれほど励ましを受けたことでしょう。難しさを覚えている中であって、神様がご自分の愛する者たちを力強めてくださるといふ揺るがない約束は、どれだけ彼らの心に大きな希望をもたらし続けたことでしょう。

今を生きる私たちも同じ神様に信頼し、この方の働きにすべてをゆだねることができ、ひとりひとりのうちに働いてくださるこの方に、拠り頼んで歩いていくことができるということです。そのためには、まず自分自身が自分は弱いということをいつも覚えていなくてはなりません。神様の助けをいつも必要とする存在だと、ただの知識ではなくて、自分のこととして認めることです。パウロは確かにそのように歩んでいました。パウロの歩みを振り返ってみたときに、彼は信仰のゆえにありとあらゆる苦しみを経験していました。肉体的にも精神的にもさまざまな苦痛を味わっていたのです。でもそんな彼は、どうしてこんな苦しい状況に自分を置くのですかと、神様に不平を抱くことも、その苦しみから逃げ出すこともありませんでした。彼は自分を不当に扱い、傷つけ、迫害してくる者に対して、怒って憤って仕返しをしようとすることはありませんでした。なぜそんな歩みができたのでしょうか？彼は言っていたのです。Ⅱコリント12：9－10に「：9 しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。：10 ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」と書いていました。パウロはどんな状況に置かれようとも、自分の力の源を見失うことはありませんでした。自分のうちにではありません。彼は自分の弱さのうちに働くキリストの力がいつも自分を励まし、奮い立たせてくださると確信していたのです。だからこそ、彼は自分の弱さを誇ることができました。

私たちがキリストの福音に忠実に歩いて行こうとするのであれば、今、私たちが見ているこのみことばに従って行こうとするのであれば、その歩みには必ずいろいろな戦いや難しさがあります。でもそんなとき、私たちのうちを見ても、どこにもその困難に勝利する力はありません。でも感謝なことに、私たちに助けがあります。どんなときも拠り頼むことのできる力ある神様がいます。私たちのうちに働き続けてくださって、私たちが想像することもできないような、測り知ることもできないような力をもって私たちを強めてくれる、そんなお方がいるのです。だとすれば強がらないでこの方にすべてをゆだねるのです。弱さを認めて、この方に自分の身をささげることです。そこに私たちは本当の力を見ることが出来ます。この方のすばらしさを私たちは見ることが出来ます。そして私たちがそのことを見たときに私たちはまた主を知り、またみことばに戻ってみことばを学んで生きていって、また主のすばらしさを知り続けていくのです。それが私たちに必要な生き方でした。私たちにとって感謝の喜びにあふれた生き方でした。互いに支え合いながら、祈り合いながらこのような者として、ともに成長していきましょう。